

## 新潟県1位<sup>(44年)</sup><sub>(産米)</sub>になった 吉田さんを訪ねて

佐藤千秋

燐硝安加里を使って昭和44年度産米多収穫で、美事に新潟県第一位(10a当り802kg)を獲得された吉田兼治さんを、まだ雪深い3月、新潟県中頸郡吉川町のお宅にお訪ねした。H課長代理とともに北陸農業試験場を訪問した翌日である。

直江津から車で約1時間、道の両側には雪が積み上げられ、水たまりが連続した道を、海岸から山手の方へ進む。歌で有名な「米山」さんが、雪をいただいて左前方に見える。いかにも美しい。

吉川農協から更に奥にはいって車をおりた。「農家の出だ」という運転手さんも興味をもち、同行することになった。

案内を乞うと、やや小柄なチョビひげのオヤジさん？が現われた。吉田さんだ。挨拶もそこそこに、額にかざられた賞状の前に案内される。多収穫一位賞、技術賞は県知事名で、その他新聞社からの賞状等でいっぱいだ。今年だけでなく、昨年も立派な成績をあげて賞をもらい、息子さんも賞をもらっているという精農一家である。

「祝」の金盃で酒をふるまわれながら吉田さんは「あんたがたのクスリのおかげだ」といわれたときは、さすがに良い気分だったが、肥料を「クスリ」とは、また、面白い表現だな…と思いながら話をうかがった。

なかなか意気軒昂で、「俺は仕事は徹底的にやる、最後の勝利を得るまでは…」、「41年100万ト達成運動の時から本気にやりはじめて以来、部落の役職もやめて稲作りに打ち込んだ。農協の松本技師が非常に熱心に相談ののってくれたが、それでもなおわかんことは、北陸農業試験場の中山先生に教えて戴いた。わかるまで訊いたよ。松島先生のV字型理論も片倉理論も勉強して良い所をとり入れた。松島先生から手紙をもらってデータと意見を申し上げたこともある。減反問題はあっ

ても、やはり反当りの生産性はたかめなければならぬ。今年は900kg目標で設計を立てている。天候が普通だったらとれる筈だ。今はこういう時代になったが、“まずい米”はあまっているが、“いい米”はいいのだ。私はタバコもやっているが、この辺は半湿田だから転換がむずかしい。“いい米”でとらねばならぬ」

今年の競作は2,000点参加があり、この中で吉田さんは良質米といわれる“トドロキワセ”を作って、多収穫品種である“レイメイ”、“フジミノリ”等を堂々40kg以上もはなしてトップをとった。良質の米は多くとれないという——これまでの観念を打ちやぶって、良質米をつくっても減少しないということを実証したわけだ。

これが多収穫一位とともに、技術賞を獲得されたゆえんである。だから、良質の米をたくさんとるんだ…という言葉は、吉田さんなればこそいえる事であろうか。

「今年は“トドロキワセ”が県でも広まるだろう。これを私が選んだのは、松本技師と中山先生と相談してきた。登熟歩合のいちばん良いのを選んだわけだ。二位もこの近くから出た。私が悪くても良くても皆がまねをするから、リーダーとしてしっかりやらねばならぬ。私は雨が降っても風がふいても、1日3回は田んぼに出た。地温、水温等みな調べるんだ。夏のむし暑つくて寝苦しい夜は、田んぼに出る方がよっぽど良いよ。」稲を大切に、可愛がる姿はさこそと思われた。

今年は部落の若い連中にハッパをかけたそうである。「若いものが明治にまけるな」と。「だが県一位になって、やっぱり“ヒゲはえらいなあ”…ということになった。県一位をとって新聞やテレビにのり、色々の講演会にもひっぱられた。俺はその時は“先生”だからなあ。アッハッハ」と笑い飛ばした。なかなか面白いオヤジさんであった。(鼻下にチョビヒゲをたくわえていることは前述のとおり)今年からは例の生産調整で新潟県の多収穫競作も中止になるが、稲作が大切であることにはかわりはない。

話がはずんで、吉田さんのお宅を辞した頃は、金盃の酒にすっかり良い気分になって、雪の上を吹きまくる寒風もまるで気にならなかった。

(チョッ旭肥料(株)技術開発部)

〔吉田さんの耕種概要〕

それでは、参考までに吉田謙次さんの耕種概要を付記しておきましょう。

収量目標 800kg, 坪当り75株, 1株24本, 出穂(坪1,800本), 1穂平均粒数80粒, 登熟歩合90%, 千粒重21g (75株×24本×80粒×90×21g×300坪, 823.28kg)  
 苗代施肥 (3.3m<sup>2</sup> 当り元肥) 苗代配合 500g (N40g,

P40g, K40g), 過石200g, (P34g), 塩加60g (K36g)

追肥 (3.3m<sup>2</sup>, 田植え10日前) (5月8日)

硫安20g (N4g), 過石100g (P17g)

播 種 4月9日

本 田 栽培様式 36cm×12cm=75株×3~4本植

田 植 5月18日

施 肥 法

肥料名	施肥期	田植後 日数	出穂前 日数	施用量 kg	成 分 (kg)			備 考
					N	P	K	
珪カル 燐 燐	4.30	-18	91	210 90		18.0		耕種前元肥。稲の健全化を図る耕種前全面散布。
硫 安 塩 加	5.3	-15	-87	15 10	3.15		6.0	耕種後元肥。灌水になるべく近づけて散布。
磷硝安 加里 重過石	5.24	6	66	15 10	2.25	2.25 3.4	1.8	活着及び分けつ促進肥と第1回追肥。活着時に浅水として散布するが、活着がおくれたので、深水のまま散布。
磷硝安 加里	6.3	16	56	15	2.25	2.25	1.8	浅水とし、水の移動のないようにして散布。
塩 加	6.22	35	37	5			3.0	稲作健全化を図るため、中干前6日、出穂前約40日に散布。
尿 素 加	7.10	53	19	10 5	4.6		3.0	1回目の穂肥、穎花退化防止のために、出穂20日前頃幼穂の長さが5mmの時期。
磷硝安 加里 塩 加	7.17	60	12	10 5	1.5	1.5	1.2 3.0	2回目の穂肥、減数分裂期の栄養補給、おしべ、めしべの発育促進のために、出穂前13~14日頃、幼穂が2.5cmの時期。
尿 素	8.4	78	6日後	10	4.6			実肥として穂揃期に。
計					18.35	27.40	19.80	出穂期7月29日, 穂揃期8月4日。

(注) 出穂期より見て-40日から-20日までNが効くと無効分けつが多くなり、節がのびシイナが多くなるので、その間にNが中断すべく磷硝安加里を追肥し6月3日(出穂56日)から7月10日(出穂前19日)までにN肥

を中断した。そのため6月25日頃から稲の色があせてきた。それと合せて6月28日から7月5日まで完全落水して中干を行なった。

用 水 管 理

5月18日 田 植 深水 5月28日 活 着 間断灌水排水 6月28日 中 干 7月5日 間断灌水 → 渚水

除 草 及 び 防 除 (略)

収 量 構 成

$$75株 \times 18.4 \times 107粒 \times 84.7\% \times 21.9g \times 300坪 \times 1.0083 = 802.034kg (10アール当)$$

坪 当 り 株 数	一 株 穂 数	一 穂 平 均 粒 数	登 熟 歩 合	千 粒 重	10 ア ー ル 換 算
-----------------------	------------------	----------------------------	------------------	-------------	-----------------------------